

菊本副院長の漢方問答 その61



問 「脂質異常症の漢方治療とはどのようなものですか？」①

答 肥満と関係が深い「脂質異常症」の漢方治療について、お話しします。

表は、日本東洋医学会が出版している「漢方医学テキスト」に記載されている「脂質異常症の頻用漢方薬」

です。「大柴胡湯」「柴胡加龍骨牡蠣湯」「防風通聖散」「防己黃耆湯」「桂枝茯苓丸」「桃核承氣湯」は、前々

回までにお話した「肥満の頻用処方」にも登場していることから、肥満

と脂質異常症の病態が似通っていると推定されます。また、「八味地黄丸」

は、前回の「高血圧」で、お話ししました。今回は「当帰芍薬散」について、

お話しします。

当帰芍薬散は、「金匱要略」という、漢方の極めて重要な古典で紹介されています。

構成生薬は、当帰、芍薬、川芎、茯苓、白朮、沢瀉です。

金匱要略の条文には、「妊娠中に

お腹が痛むときには、当帰芍薬散が有効である」「妊娠とは限らず、女性の腹痛には、広く、当帰芍薬散が有効である」と記載されています。

図1は、江戸時代に出版された「腹證奇覽」に掲載されている当帰芍薬散の腹証図です。おへその周囲から下腹にかけて所見があります。「むくみ」を表わしていると考えられます。

図2は、私の漢方の師匠が描かれた当帰芍薬散の腹証図です。みぞおちから下にかけて①と、下腹②に所見があります。いずれも「むくみ」を表わしています。薬草では、

①の「むくみ」を茯苓と白朮が、②の「むくみ」を沢瀉がさばきます。

当帰・芍薬・川芎は「血の流れ」を調べます。当帰芍薬散は、「むくみ」をとり、「血の流れ」を調えることにより、余分な脂肪をからだから出しやすくしてくれます。

図1は、江戸時代に出版された「腹證奇覽」に掲載されている当帰芍薬散の腹証図です。おへその周囲から下腹にかけて所見があります。「むくみ」を表わしていると考えられます。

図2は、私の漢方の師匠が描かれた当帰芍薬散の腹証図です。みぞおちから下にかけて①と、下腹②に所見があります。いずれも「むくみ」を表わしています。薬草では、

①の「むくみ」を茯苓と白朮が、②の「むくみ」を沢瀉がさばきます。

当帰・芍薬・川芎は「血の流れ」を調べます。当帰芍薬散は、「むくみ」をとり、「血の流れ」を調えることにより、余分な脂肪をからだから出しやすくしてくれます。

しやすくしてくれます。

脂質異常症の頻用処方

だいさいこうとう おうれんげどくとう
大柴胡湯 黄連解毒湯

さいこかりゅうこつぼれいとう けいしぶくりょうがん
柴胡加龍骨牡蠣湯 桂枝茯苓丸

ぼうふうつうしょうさん とうかくじょうきとう
防風通聖散 桃核承氣湯

ぼういおうぎとう とうきしゃくやくさん
防己黃耆湯 当帰芍薬散

さんおうしゃしんとう はちみじおうがん
三黄瀉心湯 八味地黄丸

(日本東洋医学会、「漢方医学テキスト」)

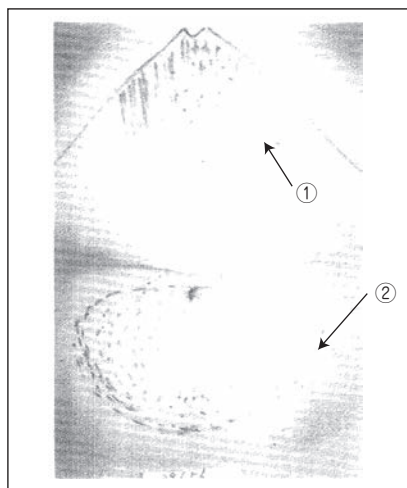


図2：当帰芍薬散の腹証



図1

皆さまから漢方に関する質問を募集しています。はがきまたは電子メールで住所、氏名（ペンネーム）、電話番号、年齢を添えて、最終ページに記載の住所またはEメール:information@ideshita-clinic.jpのいでしたクリニックとわえもあ編集係まで送付ください。